

# 木への想いを受け継ぐ 銘木仏壇にこだわり

## 石山仏具店(水戸)

石山仏具店(水戸)の先祖は木工の職人で、江戸時代初期、東照宮の造営のために、奈良の大和郡山から日光に移り、造営後は栃木県の鹿沼に居を定め職人として代々過ごし、その後、弘道館(一八四一年完成)と偕楽園にある好文亭の造営のために水戸に移ってきたそうです」と石山仏具店の石山央(ひろし)氏は自社の歴史を紹介する。

現在、店舗のある場所は幕政時代には鉄砲町と呼ばれる職人の町で、この時代には指物建具を手がけ、石山社長の祖父の代に祖父の兄が木工職人としての家業を引き継ぎ、祖父は葬儀も兼業する石山仏具店を創業する。現社長の石山豊次(とよじ)氏は昭和十二年生まれで、石山仏具店の六代目となる。水戸で指物建具を始めてからの六代目だ。豊次氏は職人ではないが、家には木工の職人がおり、豊次氏自身、子供の頃からかんな掛けなどはお手のもの。「私もそうでしたが細工場が遊び場だったので、自然と道具の扱いも覚えたのでしようね」と豊次氏の長男で店長を務める石山央氏は語る。



石山仏具店七代目 石山央氏



中央の香炉は十六面体クラシカルモダンな仏具

計で有名な店に入社し、時計などの販売業務に携わる。その後退職し「アメリカで二年間ブラブラしていました」と央氏は笑う。「ニューヨークやボストンでアルバイトをしながら過ごしました。住み込みでのベビシッターや料理の経験もあります。要は家業を継ぐのが嫌で逃げ回っていたのですが、転機は親友の死だった。「こんなところでブラブラしている場合ではない、と思いました。その時が家業を継ぐ転機となりました。店に戻ってからは、100%力を注ぐ日々が続き、サラリーマン時代とは違った充実感がありました。お葬儀は近所の方のものもあり、街で出会うと「ありがと」とお礼を言われることや、「私の時にもお願いね」と言われることもあって、こんなに感謝してもらええる仕事もあるんだなと実感しました」と央氏は語る。

石山仏具店のすぐ隣には水戸芸術館があり、高さ100mのシンボルタワーは石山仏具店の名刺に店舗と共に印刷され、まるで「石山仏具店タワー」のような感じだ。「東日本大震災の時には店の裏にみんな避難したのですが、シンボルタワーは大きくぐらぐらと揺れていたそうです。私には見る余裕がありませんでした」東日本大震災時の水戸市の震度は震度6。石山仏具店店舗ファサードの瓦も一部が落ちてしまふ。瓦葺きのファサードは店舗を印象づけるものであったが、震災被害の後には瓦の落下が危ないので取り除き、上からタワーと同じ色の金属で覆っている。

展示仏壇の特長のひとつは木へのこだわりであり、銘木仏壇を揃える。「先祖が元々木工職人だったこともあり、自分も銘木には癒やされますね。木へのこだわりがあるお客様には、自分の想いを伝えることもありまして」と石山央氏は語る。最近楽器を習い始めたという石山氏だが、お客様とのさらなる響き合いが期待される。

◎石山仏具店 水戸市五軒町一六四 TEL 〇二九(二二二)二四七八 FAX 〇二九(二三二)六五八五



石山仏具店の外観 後ろにそびえるのは水戸芸術館のシンボルタワー



伝統的な唐木仏壇の荘厳



洒落た和風テイストの仏具で仏壇を引き立てる